ハイスクールD×D One Eyed Ghoul《凍結》

ディアブロ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は、隻眼の喰種（グール）である。全てを喰らいつくした後は何も残らず殺しまくった残骸を喰らう毎日。

そんなある時、少年は、一人の少女に出会った。

目次

龍神と喰種 ―― 1
死神の赫者 ―― 6
龍神

龍神と喰種
死神の赫者

東京渋谷区には雪が降っている。しかし、普段活気づいているはずの街には誰もいない。

12月24日のクリスマスは、カップルなどが大通りを行き来しているはずなのに静かである。

ズシリ、ズシリ。

何かが重い足取りで歩いている音が聞こえる。

それは、黒く人の骨のような姿をしたナニカが歩いている。

両肩からは、黒い両刃剣のようなのが生えており、両腕は黒く先端部が二つに分かれて鋭い爪が生えている。

背中からは都合八枚の淡い炎のような羽が生えており、そのうち左右の四枚が黒い刃。

腰の辺りからは黒い尾と、蛇腹のようなところどころ刃が生えている触手が六つ生えている。

頭部は赤い目が鋭い右側に表れているだけで左目の部分はバツ印が浮かんでおり、下顎はとんがっている。
その巨体は降り積もった雪の上を歩いている。
それは、この東京では誰もが知る最強にして最凶最悪の喰種（グール）である隻眼の髑髏。
髑髏は常に自分に襲い掛かってくる者は、人間は勿論、喰種（グール）も殺す。
常に彼は右目だけを開いた仮面をしていることから、隻眼の髑髏と呼ばれている。
場所を移して、東京渋谷区の某所。
複数の鈍色の防護服にアサルトライフルを持ったメットをしている人間が横に並んで前方に構えている。
そして、その前方には長身で黒い髪をした青年が赤黒いこん棒のようなのを右手に持っている。
「こちら、第四隊。丸手さん、聞こえますか？」
『ああ、聞こえている。どうした、亜門上等？』
青年の名は亜門　鋼太郎。様々な功績を挙げた上等捜査官である。
「ドクロを肉眼で確認。これより、戦闘を開始します」
『わかった。そっちに、増援を送る。それまで時間を稼げ』
丸手という男と通信している亜門はフッと笑った。

「別に、倒してしまってもいいんでしょう」
『ああ、死ぬなよ』
「はい、通信終了」
ズシリズシリと重い足取りで歩いてくる髑髏に亜門はクインケを両手で構える。
亜門のクインケはドウジマと呼ばれる打撃や叩きつけることに特化したクインケである。
かつて、上司であった真戸（まど）から托された大剣状のクインケ〝クラ〟を髑髏に破壊されて、ドウジマにした。
未だに重い足取りで歩いてくる髑髏に警戒を解かない。
「俺が行く、援護してくれ」
「「「「「「「「「「「「はっ！」」」」」」」」」」」」
だが、さっきまで重い足取りで歩いていた髑髏が走りだした。
まるで、豹が走っているかの如く。獣のような黒い足で、その巨体に見合わない速度で接近してきた。
「うおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!」
亜門は走ってくる髑髏に接近するために走る。
ブオンッ！

両肩を上腕部まで覆った右腕の両刃剣を亜門に振り下ろす。
ガキィインッ!!
しかし、亜門はそれを自分のクインケで防御して右へ受け流す。
「もらった!!」
亜門はドウジマを髑髏の顔面に叩きつけるために斜め右から振るう。
だが、それは浅はかでった。
ドスドスドスドスッッッッ!!!!
「ぐ、が、はっ!!」
亜門は腹部に激痛を感じ、顔をしたに向ける。
そこには、黒く鋭い刃が亜門を貫いていた。
「がはっ!　ぐ・・・うあ・・・」
亜門はその場に崩れ落ちた。
最後に彼が見たのは死神だった。闇より深い漆黒の死神のカナシイ顔を。
それから数時間後、特等、準特等やすべての捜査官が集ったが無意味であった。
髑髏によって全滅した。
ある者は、甲赫（こうかく）によって切り裂かれ、羽赫（うかく）に撃ち殺されたり刺されたり、鱗赫（りんかく）によって刺突され、尾赫（びかく）によってバラバラにされた。

髑髏は歩いている。その重い図体で東京をあるいている。白い雪は辺り一面が真っ赤な血で染まっている。

そして、髑髏は全身の赫子（かぐね）は胸骨の部分がガパァと開き離散していく。

そこから現れたのは、銀色の髪に左目が銀色をした右目だけが赫眼（かくがん）をした少年だった

龍神

東京　渋谷区。１２月２５日。
あの惨劇から1日経った渋谷には、未だに雪がしんしんと降っている。
降り積もった雪の上には沢山の人の死骸が転がって、赤く染まっている。
その上を銀色の髪の少年は歩いている。
上半身は裸で、鍛え上げたように引き締まった体をしている。
所々がボロボロのズボンを穿いており、靴は履いていない。
銀色の後ろ髪は腰の辺りまで伸びており、前髪は左目を隠すように覆っている。
右目は完全に赫眼をしている。
少年は、赫眼に移ったヒトの亡骸を見て、黒い尾赫を一本だけ出現させて、それに突き刺した。
死んだふりをしていないかの確認である。少年はそれを確かめた後、右手を手刀にして勢いよく心臓付近に刺す。そこから心臓を取り出して、ガブリッと喰らいついた。
そして残った部分は鱗赫で全て喰らう。
それが、少年の喰事方法である。

赫者(かくじゃ)になった時から彼が得た新たな喰事方法。赫者(かくじゃ)になった時に編み出したのだ。

ぐうぅ～。

新しい食料(ヒト)を探す為に歩き出した。

下を向いたまま歩いていると、人の気配を感じた。

後ろを振り向いてみると、黒いゴスロリの服えお着て大事な部分は？印で隠している少女が少年の後ろに立っている。

「君、何？」

右目で少女を少年は見据える。今まで出会ってきた人間の中で、少女は異質に見えた。少年の質問に、少女はこう答えた。

「我、オーフィス」

少女はオーフィスと答えた。

「ふーん。じゃあ、オーフィスは、なんでそんな寒い恰好をしてるの？」

少年の質問にオーフィスは首を右に傾け？とと思った。

「寒い？　我、寒いと感じたこと、ない」

オーフィスの答えに少年は自分と同じなんだと悟った。

「そう。じゃあ、君を喰っても問題ないよね」

少年は肩甲骨付近から黒い両刃剣の甲赫(こうかく)纏い、オーフィスに向かって走る。

「ばいばい」
左側の甲赫を振り下ろすを叩き切った感触を感じない。
少年は甲赫を見ると切られている。
何が起きたのか少年は理解できなかった。
このままではマズいと感じた少年は後ろへジャンプして、右足から着地した。
そして、背中から羽赫を展開した。
淡い影のような四枚の羽赫を高質化させ、それをオーフィスに向けて大量に撃つ。
だが、オーフィスに当たる直前にガラス細工のように次々と割れていく。
いくら撃っても、撃っても同じようになっていく。
ならばと思った少年は片刃の羽赫を展開した。が、それを引っ込めた。
これ以上やっても無意味だと感じた少年は、結果は同じだと感じたのだろう。
「やめた。君の勝ちでいいよ」
少年はお手上げと言わんばかりに両手を頭の上にあげた。
「我、お前に用がる」
オーフィスは少年に近づいてこう頼んだ。
「グレートレッド倒してほしい」
少年はなんのこっちゃと思った。

「グレートレッド？　何それ？」

オーフィスは右手を差し出して、我の手、握ると言ってきた。

「？　いいよ」

少年がオーフィスの右手を掴んだ瞬間、この世界から消えた。